

# 赤荻館遺跡発掘調査報告書

—一関支線他保安対策30（共同）工事ならびに関連撤去工事に伴う発掘調査—

平成31年3月

東北電力株式会社送配電カンパニー岩手支社 発行

一関市教育委員会 編集

# 序

一関市赤荻地区は、古くから交通の要衝であり、現在でも東北自動車道が南北に縦貫しています。縄文時代から人々の生活が確認でき、多数の埋蔵文化財包蔵地が所在しています。

それらの一つに、赤荻館遺跡があります。中世の城館跡で、周辺と比較して規模が大きいものです。この度、一関変電所から北へ送電するための鉄塔を更新することとなり、新たな鉄塔の設置と既存鉄塔の撤去を計画しました。新たな鉄塔の設置場所が赤荻館遺跡の範囲内にあたり、一関変電所との位置関係から設置場所を変更することができないため、記録保存のための発掘調査を実施しました。この調査成果をまとめたのが本報告書です。

本書により、これらの調査成果を広く公開し、市民並びに全国の方々にも当市の文化財を知って頂き、関心が高まることを期待しています。また、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

最後に、調査に際しては地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々のご協力を頂きました。衷心より感謝を申し上げます。

平成31年3月

東北電力株式会社  
送配電カンパニー  
岩手支社長 高 杉 和 郎

一関市教育委員会  
教育長 小 菅 正 晴

# 例 言

- 1 本書は、岩手県一関市教育委員会が実施した赤荻館遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、平成30年度に東北電力株式会社送配電カンパニー岩手支社が実施した一関支線他保安対策30（共同）工事ならびに関連撤去工事に伴う、記録保存を目的とした発掘調査である。
- 3 調査対象地は、一関市赤荻字宿116-2、116-3、116-5、116-6、116-7、116-8である。
- 4 調査主体は、一関市教育委員会 教育長 小菅正晴であり、現地調査は文化財課が担当した。
- 5 調査体制は以下のとおりである。

教育委員会	文化財課	課長	佐藤武生
		文化財係長	坂本光司
		学芸員	菅原孝明
		文化財調査研究員	畠山篤雄
		文化財調査研究員	二階堂里絵
		期限付臨時職員	菅原友明
- 6 本書の執筆は二階堂が担当した。編集・校正は文化財課職員の協力を得て菅原孝明が行った。
- 7 本書の図2に使用した地形図は、一関市長の承認を得て、測量成果を複製したものである。（許可番号 平成31年2月14日総第11016号）
- 8 調査に係る補助業務は本寺地区地域づくり推進協議会に、無人航空機（UAV、通称ドローン）による遺構の空中撮影は東北電力株式会社送配電カンパニー岩手支社に、それぞれ委託した。
- 9 調査協力者・機関（敬称略）  
佐藤剛一、赤荻歴史遺産保存の会、本寺地区地域づくり推進協議会

# 目 次

序 ..	.....	01
例言 ..	.....	02
目次 ..	.....	03
1 位置と環境 ..	.....	04
2 調査に至る経緯 ..	.....	08
3 調査結果 ..	.....	09
4 まとめ ..	.....	18
写真図版 ..	.....	19
抄録 ..	.....	37

# 1 位置と環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年9月20日に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の7市町村が合併、さらに23年9月26日に藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1,256.42km<sup>2</sup>である。

中央部を北上川が南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山（須川岳）を中心とする火山性山岳風景地の「栗駒国定公園」（昭和43年(1968)国指定）や北上川水系磐井川流域の史跡「骨寺村荘園遺跡」（平成17年(2005)国指定）および重要文化的景観「一関本寺の農村景観」（平成18年(2006)国選定）、下流部には変化に富んだ溪谷景観をなす名勝及び天然記念物「巖美溪」（昭和2年(1927)国指定）がある。東側には同じ北上川水系の砂鉄川流域に、名勝「猊鼻溪」（大正14年(1925)国指定）がある。

赤荻館遺跡がある一関市赤荻字宿は、市の北端中央付近に位置する（図1、2-4）。遺跡は、東西に延びる磐井丘陵の南縁から南東に張り出した半島状の丘陵にあり、特に北東側は急峻な崖になっている。標高110m程の平場を頂点として、階段状に郭が配される直線連郭式の中世城館で、空堀と土塁が確認できる。付近の磐井丘陵上には田高館（表1、図2-2）、宮田館（表1、図2-7）等の城館があるが、赤荻館の規模はその中でも最大級である。

また、周辺は古来より交通の要衝であった地域であり、現代においても遺跡の東約0.4kmに東北自動車道、東約1.6kmに国道4号線がそれぞれ南北に縦貫する。赤荻村の『風土記御用書出』（安永4年(1775)）に「一 東海道跡 …（中略）往古東海道の由にて当郡黒沢村大窪と申す所より当村通当郡平泉村へ相出候旧往還にて大難所に御座候。田村將軍東夷征伐の御時御通被成候申伝え 今に海道の跡相残居申候事…（以下略）」と記されている。赤荻館の直南東に磐井駅擬定地（表1、図2-5）が比定されている。

赤荻館は、日光館とも呼ばれ、葛西家家臣の小岩大膳重光が天正年中（1573～1592）に住んだと伝えられる。赤荻村の『風土記御用書出』（安永4年(1775)）に以下の記載がある。

「一 要津院西日光館 一名 赤荻館 堅四拾間横三五間

一 二ノ丸 右は当時松林に罷成間数可申上様無御座候事

葛西御家臣小岩大膳様重光天正年中御住居の由申伝候事」

『仙台領古城書上』（延宝年間(1673～1681)）には、「赤荻城」として「本丸」東西三十間、南北二十三間、「二の丸」東西八十間、南北十五間、城主は小岩大膳とある。

その他、『葛西真記録』（江戸時代）には、天正18年（1590）の葛西家が没落した戦の陣容の中に、赤荻城主、岩渕壺岐守経道の名がある。

一関市赤荻の荻荘家の『荻荘系譜』では、13世紀～14世紀前半頃の人物である五代良常が「日高見日光館」を修理して武道館としたと伝えられており（千田2001）、当城館は中世前期には既に使われていた可能性がある。

館の中心に近い郭の北東端には日光権現社があり、石造物群およびその直北東に土塁と空堀が確認できる。赤荻村の『風土記御用書出』（安永4年(1775)）に以下の記載がある。

「一 一村鎮守日光権現社

一 小名 清水

一 勧請 田村將軍東夷御征伐の節延暦年中御勧請の由申伝候事

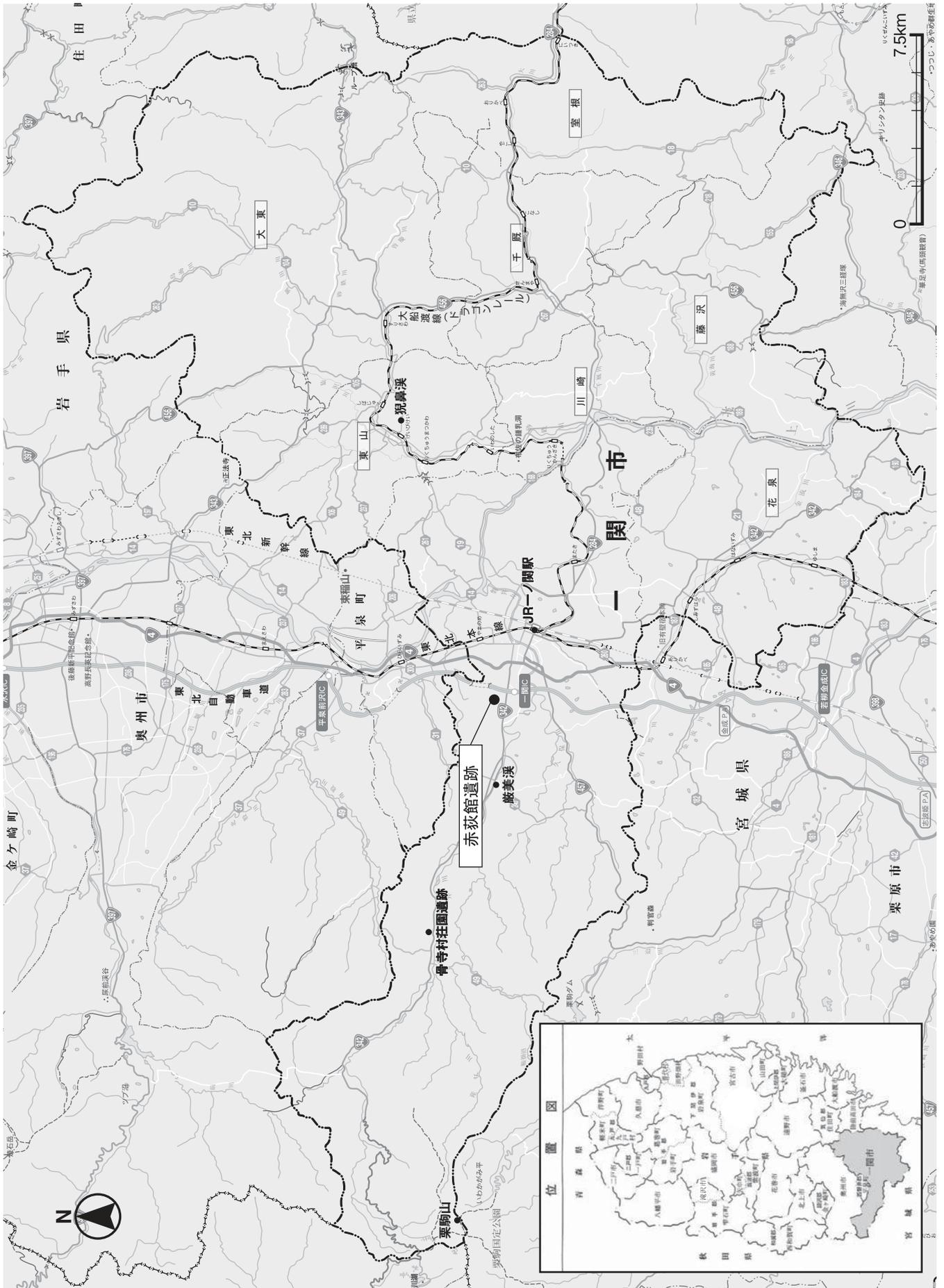


図1 赤荻館遺跡位置図

- 一 社地 竪拾間横拾間 一 社 東向二間作
- 一 鳥居 東向
- 一 地主 当村本山派観鷲院
- 一 祭日 二月八日九月八日

石造物群の前（南）列は日光権現社石祠が1基、後（北）列は西から順に祠が3基、瓢箪形で性格不明の石造物が1基、さらに祠が2基並ぶ。前列の祠は、台座を含む高さが約1.6m、幅約1.2m、奥行約1.2mである。その両側面および背面には文字が刻まれ、内部に御神体とみられる木像が1躯安置されている。祠の刻字は判読不明な部分が多いが、「日本秘密大日尊日輪観世音 観音應化且大垂址明日神」「寛政八年（1796）丙辰十月三日」の文字が読み取れる他、多数の人名が並び記されていることが確認できる。

No.	遺跡名	種別	年代	遺構	遺物	発掘調査年度	文献
1	石坂柵	城柵跡	平安				
2	田高館	城館跡	中世末	土塁			
3	福泉	散布地	縄文		縄文土器（後期）		
4	赤荻館 （日光館）	城館跡	中世末	連郭、空堀		平成30	
5	磐井駅擬定地	駅家跡	平安				
6	弥悦塔	墳墓	近世				
7	宮田館	城館跡	中世末	空堀			
8	赤荻焼	生産遺跡	近世		陶器		
9	月町	散布地	平安		土師器	昭和49	岩手県教育委員会1980
10	若宮館 （中条館）	城館跡	中世末	空堀、経塚	土師器、須恵器、陶器、瓦、轆羽口、改元通宝	昭和50	一関市教育委員会1976・2008
11	泥田廃寺A	寺院跡	平安	礎石、掘立柱建物、堅穴建物	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦、轆羽口、鉄製品、鉄滓、桔梗台	昭和48・49・50	一関市教育委員会1975・1976・2008
12	泥田廃寺B	寺院跡	縄文・平安		石器、土師器、須恵器		
13	下袋	散布地	縄文・弥生		縄文土器（後期）、弥生土器		
14	五輪塚	塚	中世	塚1基			
15	天王塚	墳墓					
16	中島	散布地	平安	住居跡	土師器		
17	松ノ木	散布地	平安		土師器		
18	小松柵擬定地	城柵跡	平安				
19	谷起島	散布地	縄文・弥生		石器、縄文土器（晩期）、弥生土器	昭和51・54～56	一関市教育委員会1977・1980～1982
20	口袋	散布地	弥生		弥生土器		
21	下モ下釜	集落跡	平安	住居跡	土師器	昭和48	岩手県教育委員会1980
22	野中	散布地	弥生				
23	釜淵	散布地	縄文		石器、縄文土器		
24	工業高校隣接	散布地	平安		土師器		
25	西光寺裏	散布地	縄文		縄文土器（中期）		

表1 周辺遺跡一覧表



図2 調査地点および周辺遺跡位置図

## 2 調査に至る経緯

東北電力株式会社送配電カンパニー岩手支社から鉄塔新設の計画が示されたのは、平成28年度のことである。鉄塔新設の事前工事として、ボーリング調査及び資材運搬用モノレール設置工事を実施されることとなり、平成28年12月13日付けで埋蔵文化財発掘の届出が当教育委員会へなされた。本工事は工事面積が狭く遺跡への影響は少ないと考えられたため、12月22日付け教文第09015号文書により慎重工事の回答をしている。

その後、当教育委員会と東北電力株式会社送配電カンパニー岩手支社による協議で、鉄塔本体の設置工事の実施時期を平成30年6月からとすることとなった。平成30年1月12日付けで試掘調査依頼書が当教育委員会へ提出され、これを受けて3月20日に試掘調査を実施したところ、造成層、土坑等の遺構を確認した。3月28日に東北電力株式会社送配電カンパニー岩手支社と協議を行ったが、鉄塔設置位置の変更はできず、工事による遺跡破壊は確実であるとの結論に達した。そして、4月11日付けで埋蔵文化財発掘の届出が当教育委員会へなされ、4月18日付け教文第01019号文書により発掘調査と回答し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。



鉄塔新設予定地点の調査前状況(南東から)

### 3 調査結果

調査地点は、一関市赤荻字宿116-2、116-3、116-5、116-7、116-8である（図3）。赤荻館遺跡の南端に位置し、標高は約70～80m、現況は山林となっている。

鉄塔の基礎および仮設道路設置に伴う掘削予定部分に1～4トレンチの4つの調査区を設定した。ここは斜面であるが、西側に段差があり、1トレンチの南端と2トレンチの北端では約2mの比高差がある。また、この北側は比高差約3mある郭となっており、その南西隅に5トレンチを設定した（図4）。

重機を用いて表土を除去後、遺構の確認を行った。平面図はトータルステーションを用いて作成した。写真撮影は、デジタル一眼レフカメラを用いた。土色表示は新版標準土色帳1997年度版（日本色研事業株式会社）を用いている。

現地での調査期間は平成30年5月14日から6月28日、調査面積は201.1m<sup>2</sup>である。

利用した測量基準杭の成果（世界測地系第x系）は、以下の通りである。

基T1 X=-117,236.337、Y=+22,892.092 H=80.125

基T2 X=-117,330.394、Y=+22,950.855 H=62.973

#### （1）基本土層（図6、写真図版10-2）

**I層** 10YR3/4暗褐色シルト。草の根が多く入る。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。現表土層（図6-1層）。

**II層** 10YR4/3にぶい黄褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりややなし。表土層（図6-2層）。

**III層** 10YR5/4にぶい黄褐色シルト。粘性あり。硬くしまる。地山層（図6-19層）。

**IV層** 7.5Y5/2灰オリーブ色砂質土に鉄分の筋がラミナ状に入る。粘性あり。硬くしまり、岩盤状になっている部分もある。地山層（図6-20層）。

#### （2）遺構

##### 土坑1

1トレンチ南端のIII層上面で確認した（図5・6、写真図版13）。長軸1.0m、短軸0.8mの楕円形で、深さは確認面から0.2mで壁は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色シルトに地山塊が混じる。

他遺構との重複関係はない。遺物は出土せず、年代、性格は不明である。

##### 土坑2

3トレンチ南端のIV層上面でその一部を確認した（図5・6、写真図版16）。東西1.8m以上、南北2.5m以上で、その西半は調査区外にあるが、全体は方形に近い形になる可能性がある。深さは最大で確認面から0.2mあるが、南端ではほとんど深さがなく、削平を受けたものとみられる。北と東の壁下に沿うごく浅い溝と、底面中央付近に窪み状のピットを1基確認した。埋土はほとんど残っていないが、灰黄褐色シルトに地山塊が混じる土を一部に確認した。

他遺構との重複関係はない。遺物は出土していないが、形状から中世城館に多くみられる竪穴建物である可能性がある。

##### 溝1a・b

1トレンチ北部と3トレンチ北端のIV層上面で確認した（図5・6、写真図版8～13）。溝1aは北東の郭の壁下に沿って1トレンチ北東端から南西方向に7m走り、そこで南東方向に向きを変えて

7 m走る。調査区外の北東および南東にさらに延びる。また、3トレンチ北端の壁断面で浅い掘り込みを確認した。平面の位置関係から、これは溝1aの南東延長部であるとみられるが、そのさらに東の延長上にあたる4トレンチ北端では確認できなかった。3トレンチと4トレンチの間で止まる可能性が高い。溝1aの屈曲部で南東方向に枝分かれする溝を確認し、これを溝1bとした。

溝1a・bの上幅は最大で4.0m、深さは最大で確認面から0.6mで、壁は緩やかに立ち上がり断面は皿型である。

1トレンチの溝1a南東部で底面にピットを3基確認した。P1・2の間が1.9m、P2・3の間が3.1mある。これらは全て壁際に近い位置にあることから、溝1aに伴うものである可能性が高い。

1トレンチでの溝1a・bの埋土下層(図6-7層)は灰黄褐色シルトに鉄分を多く含む土で同一であり、底面に段差もみられないことから、これらの溝はひとつのものとして構築されたと考えられる。上層は、溝1aが暗褐色～灰黄褐色シルト(図6-4～6・8・9層)、溝1bはにぶい黄褐色シルトに地山塊が入る土(図6-16・17層)で、溝1a上層よりも溝1b上層が新しい堆積であり、浚渫や部分的な埋め立て行われた可能性がある(図6-断面図D)。溝1aの南東延長部とみられる3トレンチ北端で確認した層は、にぶい黄褐色シルトに地山塊が入る土で、1トレンチの溝1aとは様相が異なる。

溝1a・bとも、1トレンチ南半で確認された造成層より新しい。遺物は出土していないが、郭の形に沿って走ることから、中世城館である赤荻館が機能していた年代に構築された可能性が高い。幅の大きさに比して深さが比較的浅く、壁が緩やかに立ち上がる等の形状から、堀のような防御施設とは考え難い。底面が概ね平坦で、硬い地山であることから、通路として機能していた可能性がある。

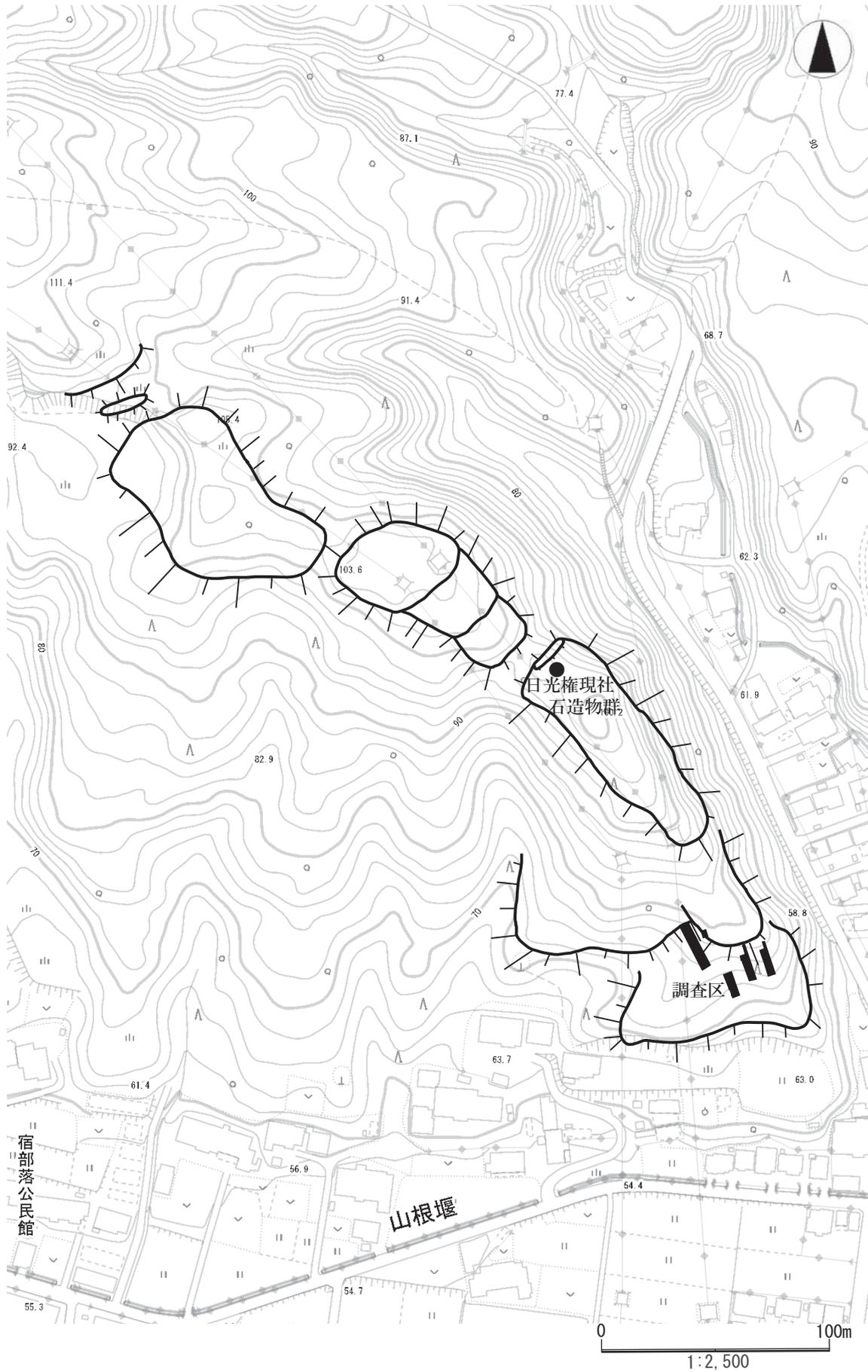
### 造成層

1トレンチ南半、2・5トレンチで造成層の可能性のある層を確認した(図6-11-14・25-35～37層)。にぶい黄褐色、暗褐色、黒褐色のシルトに地山塊が入る土である。平場や斜面の低い部分に盛り土したものとみられる。

1トレンチ南半では、造成層が溝1a・bよりも古いことを確認した(図6-断面図B-14層)。遺物は出土していないが、中世城館である赤荻館が機能していた年代に造成された可能性がある。

### (3) 出土遺物

遺物は、出土しなかった。



※縄張り図は岩手県教育委員会（1986）p181 赤荻城の図に一部加筆の上転載。

図3 縄張り図および調査区位置図

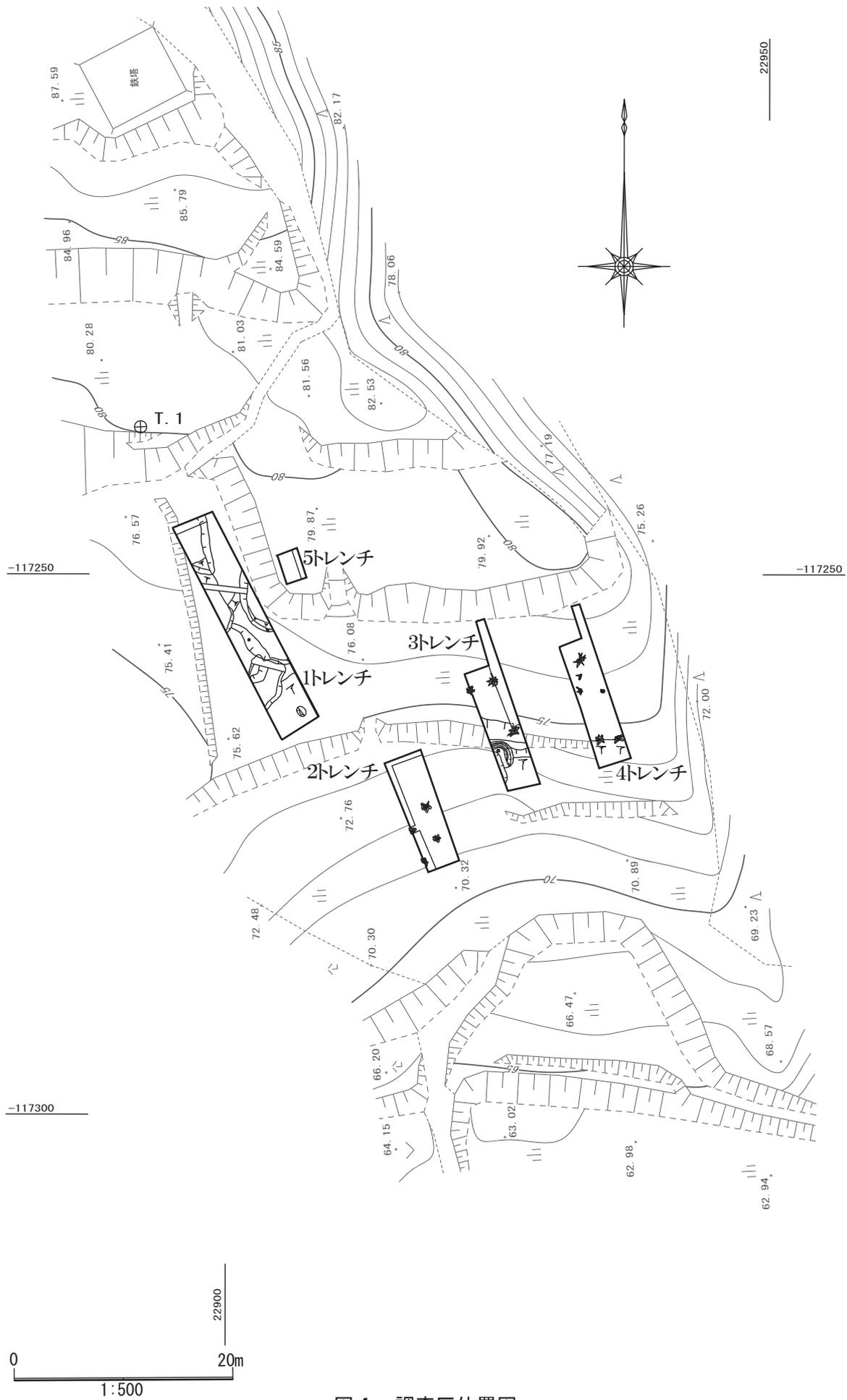


図4 調査区位置図

⊕ T. 2



図5 遺構平面図

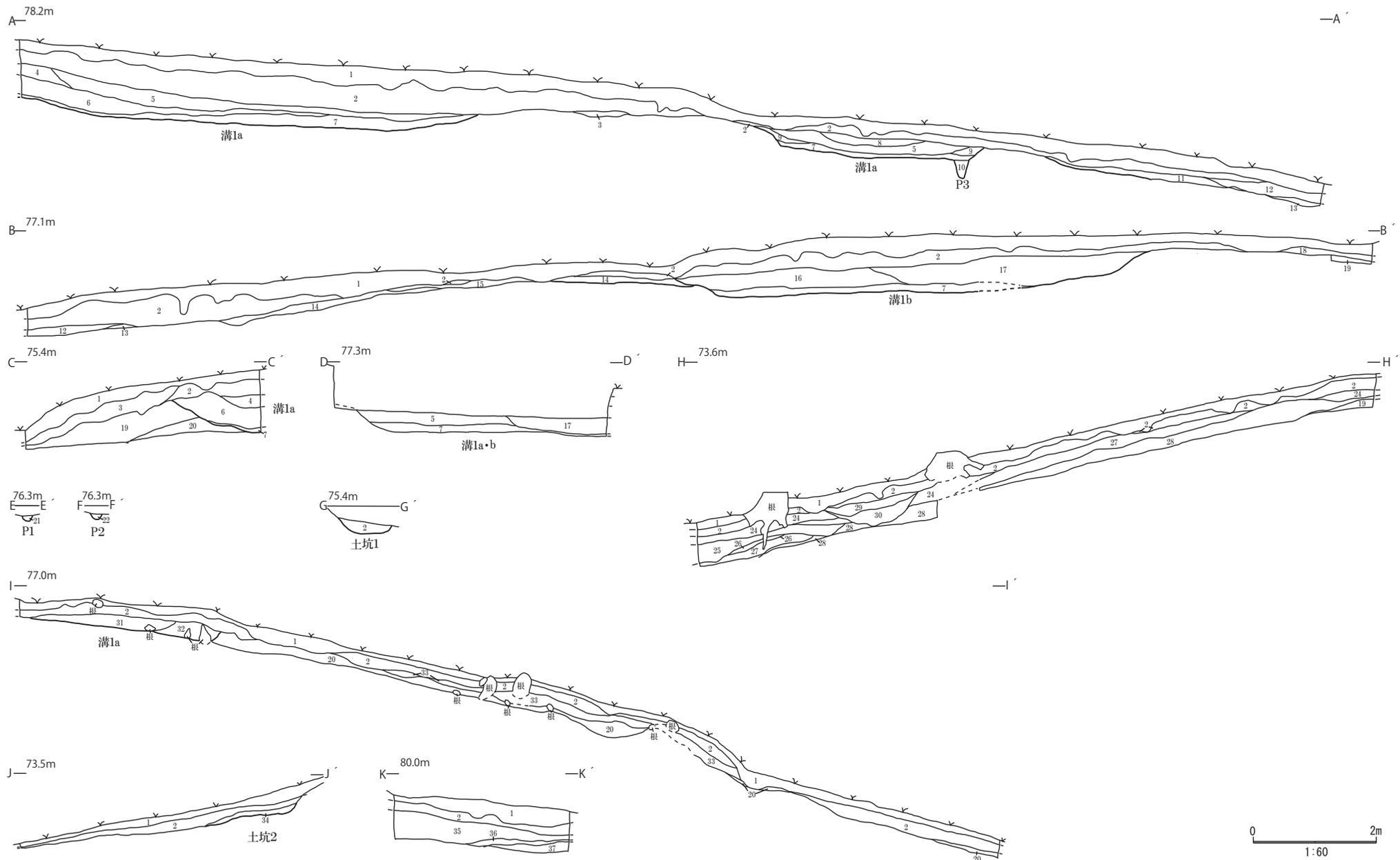


图6 土层断面图

- 1 10YR3/4暗褐色シルト。草の根が多く入る。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。現表土層。基本土層Ⅰ層。
- 2 10YR4/3こぶい黄褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりややなし。表土層。基本土層Ⅱ層。
- 3 地山塊主体でこぶい黄褐色シルトが均一に少量混じる。炭化物を微量含む。粘性ややあり。しまりあり。
- 4 10YR3/4暗褐色シルトに地山粒が均一に微量混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。溝1aの埋土。
- 5 10YR4/4灰黄褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。溝1aの埋土。
- 6 10YR4/2灰黄褐色砂質シルトに地山粒が均一に微量混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。溝1aの埋土。
- 7 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト。鉄分を多く含む。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。溝1a・bの埋土。
- 8 10YR4/4褐色シルト。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。溝1aの埋土。
- 9 10YR4/3褐色シルトに地山粒が均一に少量混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。溝1aの埋土。
- 10 10YR4/2灰黄褐色粘性シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に20～30%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P3の埋土。
- 11 10YR4/3こぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に20～30%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。造成層か。
- 12 10YR3/4暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。
- 13 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。
- 14 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5～10.0cm大)が均一に30～40%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。造成層か。
- 15 10YR4/2こぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に30～40%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりややなし。
- 16 10YR4/3こぶい黄褐色シルトに地山粒が均一に微量混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。溝1bの埋土。
- 17 10YR4/3こぶい黄褐色砂質シルトに地山塊(径0.5～10.0cm大)が均一に5～10%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。溝1bの埋土。
- 18 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりややなし。
- 19 10YR5/4こぶい黄褐色シルト。粘性あり。硬くしまる。地山層。基本土層Ⅲ層。
- 20 7.5Y5/2灰オリーブ色砂質土に鉄分の筋がラミナ状に入る。粘性あり。硬くしまり、岩盤状になっている部分あり。地山層。基本土層Ⅳ層。
- 21 10YR4/2灰黄褐色シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に10～20%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P1の埋土。
- 22 10YR4/2灰黄褐色シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に10～20%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P2の埋土。
- 23 10YR3/3暗黄褐色シルトに地山塊(径0.5～3.0cm大)が均一に5～10%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。土坑1の埋土。
- 24 10YR4/3こぶい黄褐色シルト。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。
- 25 10YR3/2黒褐色シルトに黄褐色シルト塊(径0.5～5.0cm大)が均一に20～30%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。造成層か。
- 26 10YR4/2灰黄褐色シルトに黄褐色シルト粒が均一に微量混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。
- 27 10YR3/3暗褐色粘性シルトにこぶい黄褐色シルト塊(径0.5～3.0cm大)が均一に微量混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。
- 28 10YR2/3黒褐色シルト。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 29 10YR4/3こぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～3.0cm大)が均一に少量混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。
- 30 10YR4/3こぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～1.0cm大)が均一に微量混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 31 10YR4/3こぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～3.0cm大)が均一に少量混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。溝1aの埋土。
- 32 10YR4/3こぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に20～30%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。溝1aの埋土。
- 33 地山塊主体でこぶい黄褐色シルトが均一に30～40%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりややあり。
- 34 10YR4/2灰黄褐色シルトに地山塊(径0.5～3.0cm大)が均一に5～10%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。土坑2の埋土。
- 35 10YR4/3こぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に3～5%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。造成層か。
- 36 10YR4/1褐灰色シルト。鉄分を多く含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。造成層か。
- 37 10YR4/3こぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に20～30%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。造成層か。

※番号は図6に対応

## 土層注記

## 4 まとめ

中世城館である赤荻館の南端部を調査し、溝1条、土坑2基、造成層を確認した。これらは、館が機能していた年代に構築された可能性がある。

溝は最大幅が4mと規模の大きなものであるが、比較的浅く壁が緩やかに立ち上がる形状からは、薬研堀などにみられるような防御的性格は感じられない。底が概ね平坦で硬いことから、通路として使用されていた可能性が考えられる。郭の形状に沿う溝1aから枝分かれして南東方向に走る溝1bは、南西斜面を下り、館の下に向かうとみられる。赤荻村の『風土記御用書出』（安永4年(1775)）に「一日光館の下町跡 …（中略）右町跡は葛西御家臣小岩大膳様重光当村日光館御住居の節町場の由（以下略）」と記されており、中世、館の下には町場があった。

今回の調査では、掘立柱建物跡や、生活に伴う遺物は確認されなかった。館の中心は日光権現社のある郭以北にあるとみられるため、今後、中心部の郭の遺構確認調査が必要である。

### 【参考文献】

- 一関市教育委員会1975『泥田廃寺跡第2次発掘調査概報』
- 一関市教育委員会1976『泥田廃寺跡第3次発掘調査概報』
- 一関市教育委員会1977『谷起島遺跡第1次発掘調査概報』
- 一関市教育委員会1980『谷起島遺跡第2次発掘調査概報』
- 一関市教育委員会1981『谷起島遺跡第3次発掘調査概報』
- 一関市教育委員会1982『谷起島遺跡第4次発掘調査概報』
- 一関市教育委員会2008『泥田廃寺跡 第1～3次発掘調査報告書』一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
- 岩手県教育委員会1980『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—V—』岩手県文化財調査報告書第54集
- 岩手県教育委員会1986『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集
- 千田一司2001「赤荻・萩荘系譜の一考察」『平成12年度研究紀要 第30集』岩手県南史談会



1 調査地点周辺（無人航空機による空中撮影）



1 日光権現社石祠と石祠群遠景（南から）



2 日光権現社石祠と石祠群近景（南から）



1 日光権現社石祠と石祠群近景（北西から）



2 日光権現社直北の土塁と堀（南西から）



1 日光権現社石祠の正面



2 日光権現社石祠の正面内部



1 日光権現社石祠の背面



2 日光権現社石祠の背面の刻字



1 調査地点（無人航空機による空中撮影）



1 調査区全景（無人航空機による空中撮影）



1 調査地点遠景（南から）



2 1トレンチ全景（北から）



1 1 トレンチ東壁土層断面



2 1 トレンチ東壁南側溝 1 a 土層断面



1 1トレンチ西壁溝1b土層断面



2 1トレンチ北壁土層断面



1 1トレンチ溝1完掘（南東から）



2 1トレンチ溝1 a・b東西ベルト北壁土層断面



1 1 トレンチ溝 1 a P 1 ~ P 3 (西から)



2 P 1 半裁状況(北東から)



3 P 1 土層断面



4 P 2 半裁状況(南から)



5 P 2 土層断面



1 P3半裁状況(西から)



2 P3土層断面



3 土坑1半裁状況(南西から)



4 1トレンチ造成層掘削状況(南東から)



5 2トレンチ全景(北から)



1 2トレンチ西壁土層断面



2 2トレンチ西壁土層断面南半



1 3トレンチ全景（北から）



2 3トレンチ東壁溝1 a土層断面



1 土坑2 (南西から)



2 土坑2土層断面



1 4トレンチ全景（北から）



2 5トレンチ全景（東から）



1 5トレンチ東壁土層断面



2 調査作業風景

# 抄 録

ふりがな	あこおぎだていせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	赤荻館遺跡発掘調査報告書							
副書名	一関支線他保安対策30(共同) 工事ならびに関連撤去工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	菅原孝明・二階堂里絵							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒021-8503 一関市竹山町7-5 TEL0191-26-0820							
発行年月日	2019年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あこおぎだて 赤荻館	いちのせきしあこおぎあざしゅく 一関市赤荻字 宿 116- 2、116-3、116-5、 116-6、116-7、116-8	03209	NE95 -0340	38°56'40"	141°5'48"	20180514 ～ 20180628	201m <sup>2</sup>	記録保存 調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
赤荻館	城館跡	中世	土塁、空堀、溝、 土坑、造成層					
要 約	<p>中世城館である赤荻館の南端部を調査し、溝1条、土坑2基、造成層を確認した。これらは、館が機能していた年代に構築された可能性がある。</p> <p>溝は最大幅が4mと規模の大きなものであるが、比較的浅く壁が緩やかに立ち上がる形状からは、薬研堀などにみられるような防衛的性格は感じられない。底が概ね平坦で硬いことから、通路として使用されていた可能性が考えられる。</p> <p>今回の調査では、掘立柱建物跡や、生活に伴う遺物は確認されなかった。</p>							

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第26集

## 赤荻館遺跡発掘調査報告書

—一関支線他保安対策30（共同）工事ならびに関連撤去工事に伴う発掘調査—

発行年月日 平成31年3月22日

発行 東北電力株式会社送配電カンパニー岩手支社  
〒020-8521  
岩手県盛岡市紺屋町1-25  
電話 019-653-4956

編集 一関市教育委員会  
〒021-8503  
岩手県一関市竹山町7-5  
電話 (0191) 26-0820

印刷 川嶋印刷株式会社  
〒029-4194  
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21  
電話 (0191) 46-4161(代)